◇登場人物◇

長谷川　東流（ハセガワ　トウル）17才　182cm　78kg

- 脱色しすぎで灰色の髪の毛、硬めのツンツンヘア、切れ長のキツイツリ目。喧嘩は強すぎて敵う相手はなし。進学校の北高に通ってはいるが、万年赤点。思考回路は単純、天然。子供の頃から美少年だった康史を守るうちにいつの間にか地元の喧嘩王と呼ばれ、北高の鬼のハセガワと周囲では恐れられている。(アダ名はあまり呼ばれてないが鬼平)

日高　康史（ヒダカ　ヤスシ）18才　175cm　69kg

- 東流の相棒。赤茶色の天然パーマ、タレ目に泣きボクロ。かなりの美形で、東流が一緒にいないときはよくモデル事務所などにスカウトなどされるほど。小さいころから一途に東流を思ってきたが、ついに爆発。SM拘束物フェチ。周りからはイケメン王子と呼ばれているが、脳内変態のため、いろいろかなり残念王子。

野口　誠士（ノグチ　セイジ）17才　185cm 74kg

- 中学時代からの２人の親友。黒髪で無骨そうだが、基本軽い。
- 空手の国体選手でスポーツマンのため、喧嘩に参加はしないが２人に全面的に協力してくれる。

※注意：18禁　強姦表現・輪姦・尿道攻め・スカトロあり。

◇

この日のための準備はしっかりとしてきた。

段取りも組んで、スタンガンも必要な道具もすべて買い揃えた。

ここで奪ってしまわなければ、きっとコイツはどんどん離れていくだけで、オレが手に入れることは二度とできない。

彼はこれが犯罪行為であることを十分に分かっていた上で、計画を立てて実行していた。

自分の親友に睡眠薬入りのクスリを飲ませた上で、背後から殴りつけてトドメに首筋にスタンガンを打ち込み失神させた。

悪くすれば死に至らしめる行為でもあるが、親友が簡単に死ぬような男ではないことは、彼が一番知っていた。

心臓は派手にバクバクと音を立てて全力疾走したように激しく胸を叩き、呼吸も荒くなってしまい掌にもじっとり汗が滲んできている。これは犯罪だという背徳感と、目の前に欲しかったものが無防備に横たわっている事実に、彼は高揚して興奮を覚えていた。

ずっと欲しかった相手だ。

この気持ちが叶うならば、死んでもいいし、いっそ殺されても構わないとまで考え、この無謀な計画を行動に移した。

ぐったりと力を失くした男の大きな体を引きずりあげて、ベッドへと転がすと、カッターを使って衣服を切り裂いて剥ぎ取って全裸にする。

鍛えられた筋肉の重みか、体重は十キロ近くも差があり、軽く運ぶというには難儀である。

彼は男の手首をぐいっと掴むと、ビニールテープでぎっちりと巻いて外れないように片方づつベッドヘッドの柵に括りつけた。

「……怪力、だからな」

親友が意識を取り戻したら、簡単に引きちぎってしまう可能性があるなと思い直して、彼はビニールテープの上から解けないように布テープを幾重にも巻きつけて補強した。

太く筋肉質な堅い両脚を開かせ、部屋に置いてあった護身用の鉄パイプを膝裏へ挟んで、余ったビニールテープで括りつける。

こんなに拘束したというのに、それでも逃げられるのではと不安になる。

相手はクマ並みにタフな怪力男である。早くことをすませなければ、すぐに気がついて反撃される可能性が高い。

まだスタンガンの効果があるのか、わずかにひくひくと痙攣する裸の体が艶かしく見えて、彼はそっとその胸元へと手を伸ばしてゆっくりと触れる。

ＡＶを観ていたというのに、その下半身は全くといって何の兆しもない。彼の幼馴染は、昔から性的なことには無関心で欲求も皆無に近い男だった。

「ゴメン……。トール。でも……好きなんだ」

彼は筋肉に盛り上がった胸元へと頭を載せて、脱色しすぎてぱさぱさの灰色の髪を梳くように撫で、言い訳のように謝罪を口にするが、そんな自分に嫌気がさしたかのように口の端を歪めて首を横に振った。

これからやろうとしているコトは卑劣で最低な行為で、どんな

理由があっても犯罪行為には代わりがなく、決して許されることではない。
もう一度念のためにと、スタンガンを握って男の首元へと押し付ける。
横たわった体はビクンと与えられた強い電撃に痙攣して、体が跳ねてシーツを波打たせる。
開かせて固定した脚の隙間から晒されたアナルへと、媚薬のチューブをあてがってクリーム状の薬剤をゆっくりと中に注入する。
この行為を遂げることができるのなら、後で殺されても構わない。指を薬剤のぬめりを利用してゆっくり挿し込むと中のぬくもりを感じて目を細める。
「ンッ……ふ、ッう」
これは夢なんかじゃなく、オレは東流に触れている。
浅い箇所を傷をつけないように丁寧に解し終えると、彼はぬちぬちと押し込んだ指の抜き挿しを繰り返し始めた。
東流の堅く閉ざされていた窄まりは、クリームと指の動きにつられてひくひくと蠢くように震えを刻んでいる。
目を覚ます前にという焦りを抑えて、手に入れる準備をゆっくり丁寧におこなう。決して傷つけたいわけじゃないのだ。
万が一、彼が目を覚ましたとしても、身動きはできないはずだから、大丈夫だと逸る気持ちに言い聞かせた。
この界隈では、長谷川東流の名前を知らない高校生はいないくらいに、彼は喧嘩が強くて有名だった。
一緒にいる優越感が恋だと気がついたのは、ずっと昔の話だ。
小学生の時には、もう、誰よりも彼が好きでたまらなかった。
それでもずっと親友として傍にいられれば、満足なはずだった。
欲しくて、欲しくて……たまらない気持ちをずっと隣で押し殺してきた。
だけど3年もつきあってきた彼女と別れたと彼が言い出したのがきっかけで、今になって鍵を掛けた欲望の扉が開いてしまった。
本当に……卑怯で、間違っているけど……。
でも、本当に……欲しいんだ。
もう、二度とは後戻りはできない。
東流は高校を卒業したら就職すると言っていたが、仕事を始めれば、朝から晩まで始終一緒にいることなんてもうできない。
オトナになるってことは、そういうことだ。
たとえば恋人だとしても、そんなことは叶わないのだから、ただの友達だったら、なおさら余計にだ。
指を引き抜いて体を離すとしどけない姿の東流を見下ろし、彼は溜息を漏らすように自分を赦す為の言葉を口にした。
「愛しているんだ……トール」
気を失っている東流の耳元で、届くわけがない言葉を囁く。
そんなに音量をあげていないのに、つけっぱなしだったTVからAVの声が響いて耳障りに聞こえる。
罵られても、殺されても構わない。
普段敵に見せるような激情のままに、オレを恨んで殺してくれるのなら、それでも構わない。
ローションの瓶を傾けて、指にたっぷりと絡めとると、薬剤が馴染み始めたその場所に追い討ちのように塗りこんで、隙間を少

しづつ拡げて開いていく。
東流の形のいい男らしく引きあがった眉が、きゅっと眉間へと寄せられ、次第に指の動きに快感を覚え始めてきているのか開いた唇から漏れる呼吸が湿り気を帯びて荒くなっていく。
……ずっと、触れたかったんだ。焦がれて焦がれて、胸の中はいつも燻って仕方がなかった。
関係を壊してしまえば、二度と一緒にいられることなんてない。
せめて最後の夏休み、この一ヶ月だけでもオレにくれないか。

このまま死んでもかまわないから。
早く、起きて気がついてほしい、だけど、起きてほしくない。
彼はまだ意識のない東流の堅い胸板を撫で回す。
幼い頃からオレをずっと守ってくれた。
どんなに強い相手にも怯まず、オレに何かあればすぐに駆けつけてくれた。
誰よりも頼もしいヒーローで、だからこそ愛してしまった。

「全部、トールが悪いんだよ」

どこかで自分を見捨ててくれれば、こんなキモチを抱かずにすんだかもしれないのに。
逞しい腹筋へと体を乗り上げるようにして、キリッと引き締まった唇をそっと吸い上げた。
眉をきゅっとよせて、瞼がひくひくと震えてゆっくりと開かれそうになるのを見てとると、彼は唇を名残惜しげに離す。

……かなわないなら、壊すしかない。
この気持ちをこれ以上隠し続けることも、我慢することもできない。だけど、オレはかなわないことは分かっている。
彼は再びローションを纏わせた指で、拡げるようにアナルの内側を解しながら奥におし進めると、東流の唇から熱い吐息とともに鼻にかかった喘ぎが漏れ出す。
内壁へと擦り込まれた液体のせいで、内側から熱が侵食していっているのが指にまとわりつく肉壁の熱でわかる。
「ンッ……う、ん、ふ、ッ」
開かせた内股は痙攣するようにひくひくと震え、まるでオンナのようにもじもじと腰が揺れ始めた。
「トール……かわいい……」
耳元へと言葉を吹き込み、薄く開いた唇を舐めてゆっくりと吸い上げる。常に焦がれて見つめ続けた唇を、漸く吸い上げた歓喜に、彼は何度も吸っては舐め、舌で吐息ごとすべて絡めとる。
くちゅくちゅと指先が動くのに合わせて、水音が漏れ聞こえて呼吸がせわしなくなっていくのが分かると、ぐっと太い腰を掴み引き寄せると指を増やして奥を穿つ。
足の指先がつんと反り返り、背筋がぶるぶると震え出して体が快感を受け入れ始めたのだと、彼はその姿に喉を鳴らした。
オレが東流をどんなに好きだったかなんて、決して分からないだろうし、報われる日などは永遠にこない。
そう考えると、苦しくて残酷なキモチになっていく。
このまま、快感に狂って、オレだけを見てくれればいいと思う。
こんなにも酷いエゴな愛なんて、愛と呼んでいいわけはない。